



ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 35

～混迷の現代 維新前夜かな～

<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/>

私の目の前にあるのが、日本で最初に編纂された英和辞典である。江戸末期の文久2（1862）年に初版が刊行され、いま全国でもわずかしか現存していない。貴重なこの辞書に巡り会つたのは、岐阜県の恵那市岩村町にある岩村歴史資料館であつた。

今回は、幕末の大儒学者によつて、歴史がダイナミックに変革してきたことに触れてみたいと思う。

徳川幕府

いまブームになつてゐるのが「篤姫」である。いろいろなチャンネルで、幕末を舞台としたエピソードやサスペンスものが紹介されてきた。いずれも魅力的で、視聴者に理解しやすくまとめられている。

アメリカの使節ペリーが黒船を率いてきたのが嘉永6（1853）年6月。大統領親書を受け取らせ、翌年1月に再渡來し日米和親条約が調印された。鎖国体制は終焉を迎へ、頑迷な徳川幕府も時代の波のうねり

ここから、新しい英語時代に突入したと言えよう。安政3（1856）年、江戸の九段坂下に蕃書調所が開設され、文久2（1862）年には一橋門外に移転。2）年には「洋書調所」から、歴史的な辞書が発行された。

袖珍辞書

この辞書の表紙には「英和対訳袖珍辞書」とある（図1）。袖珍は「しゅううちん」と読み、袖に入れて携帯するのに便利な小形の本、ポケット判という意味だ。本文953頁、収録単語数は約3万2千。モロッコ革で



図1

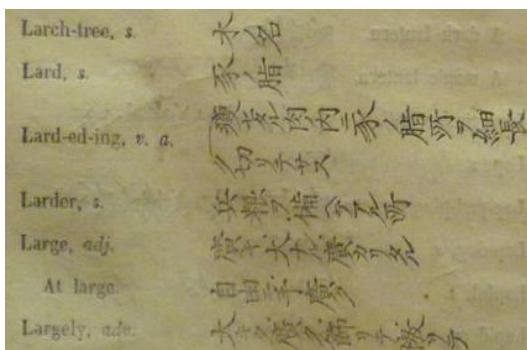


図2

漢字や仮名の活字はなかつたため、すべて手彫りの木版で作つたという。初版は活字と木版の和洋折衷で、その後は英語の活字までも木版で作成したという。

辞書から発展

辞書を編集したのは堀達之助である。嘉永6年（1853）年ペリーの来国際と、翌年日米和親条約の際に、通訳を担当。安政6（1859）年蕃書調所翻訳方、洋書調所教授方となり、歴史に残る大仕事を成し遂げたことになる。

この辞書は、岩村藩校の知新館で実際に教育に使われた。授業を行つたのは、岩村藩家老の丹羽瀬市左衛門である。彼は江戸の昌平学で学んだ儒学者であり、またま、妻の父が佐藤一斎であった。

包んだ形が当時の木枕に似ていたことから「枕辞書」とも呼ばれたという。

誌面を図2に示す。英単語「[large]」に対する日本語訳がなかなか興味深い。

そんな時代に、どのように印刷したのだろうと不思議に思い、調べてみることに。すると、オランダ政府から徳川幕府に寄贈された印刷機を使つたようだ。



図3

佐藤一斎



図4

辞書が展示されているのが、岩村歴史資料館（図3）で、隣には民族資料館もある。ここで、佐藤一斎先生の業績に触れることができた（図4）。

一斎は岩村藩だけではなく、日本の方向性を決定する江戸幕府に対しても、大きく貢献していた。ペリーの来航12日後には、幕府は速やかに異国書簡和解御用掛として6名を任命した。その一員である一斎は、文章も見識も当代随一であり、和解の草稿修正を担当することに。書簡は英文、漢文、蘭文の三通あり、漢文と蘭文は容易に読解できたが、英文は相当苦労し

たらしい。

岩村藩は文化的学問的レベルが高く、岩村藩から東教授になつた植物学者の三好学氏、近代女子教育の先駆者である下田歌子などとの縁の品々も、共に展示されている。

小泉首相による紹介

かつて、元小泉首相が、小林虎一郎の「米百俵」譚と並んで、幕末の儒学者・佐藤一斎の言葉を紹介して教育観を披露したことが知られている。

少くして学べば、
則ち壯にして為すあり。
壯にして学べば、
則ち老いて衰えず。
老にして学べば、
則ち死して朽ちず。

これが収められているのは「言志四録」である（図5）。本来は、言志録、言志後録、言志晩録、言志耄録という全4巻を総称したもの。学問や思想、人生観など多岐にわたり、修養処世の心得が1133条にわたり書かれた隨想録である。

4巻目は80～82歳にまと

めたもので、まさにスープ

ーマンのようだ。なお、「言志録」という題については、『書經』舜典に「詩は志を言い、歌は言を永くす」とあり、『志を述べる言葉をとどめ残すもの』に由来するという。

筆者が好きなフレーズを示してみたい。

小菜は是れ草根木皮

大薬は是れ飲食衣服

薬原は是れ心を治め

身を修むるなり

つまり、第一の健康法とは、毎日の生活習慣をただすことと言えよう。

また、喜怒哀楽について、喜氣は猶お春のごとし、心の本領なり。

怒氣は猶お夏のごとし、心の変動なり。

喜氣は猶お春のごとし、心の本領なり。

怒氣は猶お夏のごとし、心の変動なり。

喜氣は猶お秋のごとし、心の収斂なり。

哀氣は猶お冬のごとし、心の自得なり。

これが収められているのは「言志四録」である（図5）。本来は、言志録、言志後録、言志晩録、言志耄録という全4巻を総称したもの。学問や思想、人生観など多岐にわたり、修養処世の心得が1133条にわたり書かれた隨想録である。

樂氣は猶お冬のごとし、心の自得なり。

自得は又喜氣の春に復す。

とある。四季が巡るように、人の感情も命も、循環しているのであろう。

いまは維新前夜か？

幕末は不安定で激動の時代だった。黒船が来航して開国を迫り、幕府や朝廷は予想されない波に飲み込まれた。政治経済が変革し、世の中は騒然。明治維新が近づいていた。

もしかしたら、今日

本は、現代の明治維新か

もそれない。地域共同体が解体し、年金や医療保険、ニート、ワーキングプアなど、社会の枠組みが覆つた。人々の価値観や生活習慣までも激変。品格

までの期待しないとしても、倫理感や道徳感、人間性の根本までが揺らぐ。おぞましい事件が頻発し、将来はまったく不透明だ。

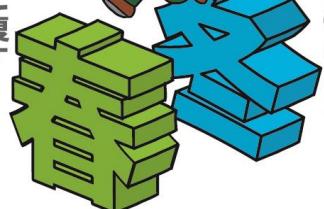
リスクばかりで、有効なクリスリもない。ちょうど、維新前夜と酷似していな

又喜氣の春に復す

現代は、物ではなく心の時代となった。その意味で、簡明直截な「言志四録」は座右の銘となろう。

確かに、一斎の肉体は滅びてしまった。しかし、その精神は、西郷隆盛や勝海舟、坂本龍馬、伊藤博文を動かして明治維新につながり、吉田茂を鼓舞して昭和の敗戦から日本を蘇らせたのである。混乱と混迷が続く21世紀の初頭には、再認識される機会があった。

数百年後には、さらに高く評価されているのではないだろうか。



樂氣は猶お冬のごとし



図5

時代だった。黒船が来航して開国を迫り、幕府や朝廷は予想されない波に飲み込まれた。政治経済が変革し、世の中は騒然。明治維新が近づいていた。

もしかしたら、今日

本は、現代の明治維新か

もそれない。地域共同体が解体し、年金や医療保険、ニート、ワーキングプアなど、社会の枠組みが覆つた。人々の価値観や生活習慣までも激変。品格

までの期待しないとしても、倫理感や道徳感、人間性の根本までが揺らぐ。おぞましい事件が頻発し、将来はまったく不透明だ。

リスクばかりで、有効なクリスリもない。ちょうど、維新前夜と酷似していな

いだろうか？

まさに、文字通り「死して朽ちず」である。

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）